

此時、儀仗兵、第一鳥居内に整列し捧銃奏樂終て、奉遷使の前後を護して進行し、奉遷使以下、第二の鳥居外に列立し、宮掌一員進みて、大廊おほはらを以て之を清め、宮掌一員進みて御鹽を灑ぎ奉る。次に、奉遷使以下參進、玉串行事所たまぐしぎやうじよに列立するや、奉遷使、主典の前に進み、宮掌、太玉串を主典に傳へ、奉遷使は拍手し、太玉串二枝を執りて參進し、正宮かぜひのくわや(風日祈宮)御門前に着せらる、次に祭主以下、太玉串を執り、御門前に着す。

階、殿内に候し、權禰宜二員、主典二員、假殿に參進、中なかの重いしづかの石壺いしづかに着き、主典、御鑰を捧げて、權禰宜を進む、權禰宜二員昇階、御扉を開き、御鑰を大床に安し、殿内に候す、主典二員昇階、殿内及大床に燈を點じ畢りて、大床東西に候し、入御を待ち奉る。

奉遷使祭主正權宮司、階下に列立し、行障絹垣及執物奉仕の主典宮掌、階下に進み、東西に分候し、宮掌五員は、御通敷布を正宮階下より、假殿階下迄敷設す。

主典めしたてふか召立文を讀み上げ奉る、諸員、召立に隨ひ執物を受け行障絹垣及奉仕の主典宮掌、大床に參昇、一拜畢りて退下し、絹垣を御階の前に寄せ奉るや、宮掌一員、瑞垣御門下に於て鶏鳴を唱ふること三聲にして、奉遷使、御階前に進みて、出御を申す三聲に及び、出御、御幌を褰け、左の順序にて、渡御あらせ玉ふ。

一二頁

六員

二頁

二頁

二員

11頁

二頁

二頁

歲事典禮

杉田の青色

杉田は武藏國久良岐郡に在りて。もと杉田村と稱せしか。今は屏風浦村の大字たり。横濱の南二里餘。海岸に沿ふて達するを得べし。梅花の名勝は國中此地を以て最とす。春色滿林

の際には銀世界の觀あり。浮動の暗香を趁ひ。横斜の疎影を訪ふ者甚だ多し。左に新編武藏風土記稿載する所の文を録して梅信を傳ふといふ。

杉田村は東の方海濱にあり。正保元祿二圖は寺家村と記す。杉田は古名にて。妙法寺大寺なりし故中頃寺家と號し。今又古名に復せり。彼寺縁起に此地杉多し故に杉田の名起れり。今此邊二十二箇村皆其地なりしといへり。又小田原役帳に間宮豊前守三百貫文久良岐郡杉田云々。但杉田郷丑年之増分は惣檢地上改可被仰付。又鶴岡領五十貫文久良岐郡杉田之内と載たり。江戸日本橋より行程十二里。東は海岸に添ひ。西は保土谷宿より金澤鎌倉に達する往來を隔て中里村に隣り。南は富岡村に接し。北は中原村に界ふ。東西南北皆其徑十二丁に餘る。土地多斥鹵なれば。穀類野蔬相應せざるをもて。殊に梅樹を多く植て其子を探る。今江戸の人杉田梅とて花時觀賞の遊客至るものは即此所なり。初梅樹を種しは百餘年前のことなれば。六七十年前迄は畠の周廻にすべて竹藪ありて。梅花の賞今の如く盛ならず。年を逐ふ多く種樹しもて行ほどに。土地の應せしにや皆能繁茂して梅林をなし。近き頃は其數幾千株と云ことを知らず。其中元よりの老樹も多しと云。此梅なべて單瓣の白花にて能賞のれり。後々は中原根岸瀧頭富岡の數村皆富村に倣て梅林を開き。年々梅實數百石を採てこれを鬻ぐ。もとこれ富村より起れるにより。都て杉田梅と

る意も沮喪し勿々去れり。今茲觀梅の途次之を八幡神社の神職山口氏并に助右老人に就き。終に居士の後裔を訊問し。略其事跡の端緒を得たれば。之を左に記載す。其確據詳細に至ては他年の再探に譲ると云爾。明治四十二年三月七日旭軒迂人誌す。

善惡居士の家宅は東漸寺と八幡神社の中間の圃中に在て。他の村家の背後に存す。其氏は荒井現戸主は義三郎と稱し。年三十左右。其母は自ら云ふ。亡夫源左衛門七年前に物故せりと。

余其家に就き事跡を問へば。主人綯手を止め。余を爐邊に引き。母を呼び來る。老婆來り應答之を久ふす。曰く實父源六は明治十二年八月十九日物故す。家は同十九年三月二十九日火災に罹り。所藏の書畫器什悉皆烏有に歸せり。適々花時なれば皆客室に陳列し觀覽に供したりし際なるを以て。之を集收するに由なかりし。獨り神佛の部分及楣上の扁額のみ救ひ出したる。宅に垂絲梅の大樹及紅梅の古木ありしが。同時に焚燒せり。抑々觀客を迎ひたるは村中我家を始とす。曾祖母善く客を遇す。或時は貴人等の來遊及留宿せるあり。粗茶野菜も亦客の賞味を博せりと。其世系は子母共に詳にする能はず。

右の婆言に據りて推考すれば。善惡居士の夫妻は現戸主の高祖なるべし。位牌等を檢せしに。文字年月消摩して之を明知

稱すれど。其味は當所の産に及ばずと云。されば花時には芳香數里に及び景色ことに勝れたり。文人往々雪霜を侵して遊賞し。今は梅花の一名區となれり。民家百軒水田陸田相半し。土性は野土にて沙交れり。梅實の外漁獵を事とす。海鼠腸殊に佳品にして。貢税の定數あり。御用船及浦役を勤む村内四條の道あり。其一金澤浦賀鎌倉の街道にて。當村と中里村との境を達す。村に係ること二丁餘幅二三間。是古道なるべしと云。三條の道は農夫作場往來の小徑なり。古の檢地は詳ならず。後の新田は寶永九年志村多宮。明和四年辻源五郎改めしと云。ともに村の南よりあり。御入國の後も間宮左衛門信繁が知行なりしに。寛保元年子孫左衛門信勝の時家廢して御料所となり。安永七年に又村内若干を割て稻葉某へ賜ひ。文化十四年又少許の處を古川山城守に賜はり。今も御料の外稻葉遠江守。古川山城守知行入會の地なり。

### 善惡居士の後裔

瀬戸 旭軒

善惡居士の名は佐藤一齋の杉田觀梅記に因りて世に知らる。往年一遊の際之を二三の村人に問ふ。皆云。罹災後不明なりと然ども湮滅に歸せしむるは遺憾なれば。更に之を追訊せんとする年あり。後再過せしも夏時なりしかば。花ありし處は何れなりしか殆んど搜索に苦む。故に興味少ければ隨て追訪す

するを得ず。惜哉。

一尺許の單獨なる位牌には。見了院殿月淨居士とのみあり。側及背にも年月日を記せず。想ふに御佑筆甚之丞のものなるべし。外に數名列記の者あり。第二位に妙淨□□文政十年□月二十日とあり。文字不明の所多し。其上位のもの一切讀過す可らず。按するに文政十年のもの或は翁媼の一ならん。翁家は妙法寺の檀徒の由なれば。寺に必過去牒あらん。就て觀たらんには或は其詳を得ん。後遊を期す。又古佛像二軀あり。一は釋尊一は不明。又四足馬の如く或は犬の如きもの一頭。仁王尊の隻はれの如きもの一軀あり。而して大は三寸許。小は高さ一寸許。或は長さ二寸許共に古雅なり。右扁額一は文化壬申、二月「梅花第一場」と大書し。末に抱一暉眞書とあり。酒井抱一は書を以て鳴る書も亦佳なり。今煤汚滿面且毀損の所あり。乃ち丁寧に保存すべきを諭す。二は右に梅花を書き次に蓬萊亭洞院「十分にすぎ田の里の花さかり勻□かくる梅の八里垣」又其次に俳諧庵蝠翁「香にむせび花はまはゆして」として書取の誤ならん盛り中田の畑の梅。とあり。中田は杉田の古名。東漸寺の老杉に因み。元祿十七年より杉田と改むと云。

老婆云。此二三の像は災餘耕作の際鋤頭に觸れ拾得たるものなり。急遽の際散亂せしもの、一なりと。當時數段の麥圃も衆人の蹂躪に遭ひ一穗を存せざりしと。